

賀川豊彦の経済観と協同組合構想

松野尾 裕（愛媛大学）

はじめに

アマーティア・センの次の一文を読むことから議論を始めよう。「たしかに、私たちが生きるこの恐るべき世界は- 少なくとも表面上は- あまねく全能の慈悲心の支配が及んでいる世界のようには見えない。(神の) 情け深い世界秩序が、どのようにして苛酷な悲惨、執拗な飢え、欠乏と絶望の暮らしに苦しむこれほど多くの人を含み得るのか。…もちろんこれは新しい問題ではない。神学者たちはこのテーマを論議してきた。神は人間が問題に自分で対処することを望んでいるのだ、という主張は知的にもかなり支持されてきた。私は宗教を持たない人間として、この論争の神学的価値を評価する立場にない。しかし、人間には生きる世界を自分たちで発展させ、変える責任があるのだという主張の持つ力を認めることはできる」(セン 2000; 325 頁)。全能の神がつくった世界になぜ不幸や悪や苦難があるのかという問いは、神学者の金子啓一によれば、「神はどこにいるか」(神義論的問い)と「人間はどこにいるか」(罪責問題的問い)という二つの問いからなる(金子 1995; 332 頁)。第二次世界大戦後のキリスト教神学は、戦時下あるいはそれ以前のキリスト教のあり方への反省に立って様々な課題を開拓した。それは第二バチカン公会議(1962~65 年)を機に始まったカトリックの解放の神学のめざましい成長もあり、フィリピンや韓国などのアジアの神学運動や、フェミニズム神学、障害者神学、反差別神学などエキュメニカルに(教派・教会を超えて)多様な展開をみせている。

近年の社会科学における共同体論、ジェンダー論、障害者論、包摂論などに見られる問題関心がこうした神学的関心と繋がりを持っていることは間違いない。日本の社会科学界ではこの繋がりをあまり意識することなく諸議論がなされているように見受けられるにしても。こうした事柄についての神学界からの積極的な発言は例えばマックス L. スタックハウス(プリンストン神学専門大学院教授・社会倫理)の『公共神学と経済』に見ることができる。「現代の科学、哲学、政治、経済、家族の問題等については、それについての一般的な知識よりも、神学的な基盤の方がより普遍的で、合理的な視点を与えられ得ると私は考えているのです。ですから真にエキュメニカルな公共神学(public theology)の視点は、ポストモダンにおける、またグローバル化する現代文明に対して適切な解釈と導きを与えることができるのです」(スタックハウス 2004, 19 頁)と。

このような研究関心の動向をふまえて以下では、近代日本の一キリスト者であり、生活困窮者支援、労働・農民運動、そしてとりわけ協同組合運動で先駆的に活動した賀川豊彦(1888(明治 21)-1960(昭和 35))の思想(経済観と協同組合構想)について考察する。

1 賀川豊彦の経済哲学

賀川豊彦の生涯と仕事に関する文献は多くあり、近年にも優れた評伝が相次いで出版された(雨宮 2003)(同 2005)(同 2006)(シルジェン 2007)。賀川自身の著作及び賀川に関わる記事・文献を網羅した書誌もそろい(米沢 1992)(米沢 2006)、賀川研究の新たな展開の基盤が整った。

賀川に関する文献は多くあるとはいったものの、経済学者あるいは経済思想史家によ

る賀川研究となるとわずかしかない。そうしたなかで賀川に深い関心を寄せたのは隅谷三喜男である。その著書『賀川豊彦』(隅谷 1995)は、管見の限り経済学者による賀川研究の単著書として唯一のものであり、賀川の信仰と社会への関心の両方に目配りがなされている。隅谷は賀川の経済学関係の主著『主観経済の原理』(1920年)を評して「かれの経済学は、経験科学としての経済学の枠をとび出してしまっている。…かれの「主観経済学」は経済学ではなく、一種の経済哲学だったのである」という。その通りである。経済学者が経済学の理論をもって賀川の著作に当たると、それは非経済学的な、時には荒唐無稽な主張とみなされるかもしれない。経済学の眼で賀川の所説のあら探しをしても、それでは賀川が著作をものした真意を掴むことはできない。そもそも賀川は経済学の訓練を受けてはおらず、経済学者ではない。

『主観経済の原理』のなかで賀川はこう述べている。「私は、此際経済学の根本的改造を叫ぶものである。それは『人間に帰れ』と云ふ叫びである」(全集9; 234頁)。賀川は既成の経済学にとらわれず自らが抱く神学に基づいて経済社会について考え抜いた。

賀川は徳島中学生時代にダーウィンの進化論を知ったが、それにすぐ続いて1905年(同中学卒業の年)には石川三四郎の著作を通じてクロボトキンの相互扶助論と協同組合の知識を得た(シルジェン 2007; 205頁)。シルジェンは、賀川が後年プリンストン大学・同神学校に留学した時(1914~16年)に主に生物学を履修したことについて、「彼〔賀川〕は胎生学、遺伝発生学、比較解剖学、古生物学の科目を取ったが、それは進化論がキリスト教と対立するものではなく、むしろ調和するものであるという彼の見解を補強するためであった」と解釈する。「進化」と「相互扶助」は確かに賀川の神学思想と経済社会論の骨格をなしている。『主観経済の原理』の冒頭で賀川は次のようにいう。

「私は経済学を欲望と労働の学問として取扱ひます。欲望と労働は共に心理的のものであり、主観的のものであります。それで今日までの経済学が欲望から出発しながらも、いつとはなしに物貨と貨幣に捕へられて行くのと違つて、私は飽迄その主観性で経済学を貫かんとする野心を持つて居るのであります。…私には学説と実行とが離れなければならぬ学説を立てたく無いと云ふ欲望から、人間そのものの経済は人間そのものの外には何ものも無いと云ふ結論を下して居るのであります。…私の学問は人間の解放の爲めであります。それで学問になつて居らぬと云ふ人があればその批評も受けませう。然し私は議論するだけの為めに此書を読んで戴きたくはありませぬ。生きんが為めに- そうです、今日まで捨てられて居た、人間価値と、宗教価値と、芸術価値と、そうして下等だと考へられて居た経済価値の総和を以つて生きた経済学を組織する時にそれはどんなものが出来るか、それを頭に置いて読んで戴きたいのであります」(全集9; 177~8頁)。これは、賀川の「主観経済学」宣言である。

2 「生命の成長」としての経済

賀川豊彦の「主観」あるいは「心理」という言葉の使い方には独特のところがある。賀川はこういう。「人間が成長する如く経済学は心理的に成長する。そして経済学が、生理的必然をのみ取扱ふものであれば、一種の記載科学としてのみ存在し得るが、人間生活が、生理的必然より切抜けて…宗教的に、道徳的に、芸術的に目醒めて来て、その自由意志を行使する様になると人間の経済生活は倫理生活の一部分に巻き込れて了ふから、

経済学も記載科学を離れて、規範科学の境域に飛び込んで来る」(同; 180 頁)。「生理」が生物的な自然＝客観性を、「心理」が人間の「自由意志」に基づく主観性を意味する言葉として使われている。しかも心理＝主観は倫理性を帯びるものと見なされる。これで「経済学は心理的に成長する」という表現の意味が理解できよう。経済学は人間の生活が倫理性を帯びるにしたがって「記載科学を離れて、規範科学の境域に」入る。これが人間の成長に即した経済学の成長だということになる。したがって賀川が説く「主観経済学」は「規範経済学」と言い換えられてよい。そして賀川によれば、経済生活は「生命の成長と云ふ一規範の中に、或決定的方向を与へられて居る」。「生命の成長」は規範であり、人間の自由意志に導かれるのである。経済生活はこの意志に指導される。

賀川は「経済史は生命史で有つて、無生物史と異なる」。「また経済史は、生命史である許りでなく、人間の主観史である」。「主観の欲求と自由意志が加はつて、初めて経済史が成立する」とまとめている(同; 202 頁)。これが賀川が唯物史観を批判し自らが拠って立つとする「唯心的経済史観」である。賀川は経済学が「人類の運命を論ずるに当つても、ただ財の分配や、賃銀の問題のみを論じて、本能的欲望の整理そのものにはちつとも手をつけずに捨ててある」という。ここにおいて賀川が求めていることは端的にいうと「境遇改善」ではなく「人間改造」の議論である。こうした賀川の議論は経済学者には不可解なはずだ。経済学は人間の内面には立ち入らずに経済生活の改善を如何に図るかという問題関心に立って、議論の方法を作ってきた。それが自由主義に立つ経済学の考え方である。賀川が求める経済学は「『どんなに儲けるか?』と云ふ経済学」ではなく「『どんなに生きて生きるか?』と云ふ経済学」(同; 236 頁)なのである。賀川は『資本論』をその英語訳で読んだ。賀川はマルクスの著作やその他の哲学書を読むことを通して、賀川なりの経済学批判を試みたのである。

1910年代から20年代のイギリスにおいてコールらにより唱道されたギルド社会主義という考え方が力をもったことがある。労働組合などをギルドと呼び、それらのギルドを基礎にして産業自治をつくり、最終的には階級国家を廃絶するという主張である。賀川はこのギルド社会主義を知っており、彼の抱く社会改革策はここから発想を得ているといつてよい。ただし賀川は社会主義という言い方を嫌い、自分の主張は「社会化主義」だという。「私はギルド・ソシアリズムの論者だとされて居るが、私自身としては動的人格的社会化主義の論者で有つて、社会性の進化によつて社会を向上せしめやうと考へて居るものにしか外なら無い」(同; 255 頁)と。社会化とは「社会性の進化」である。社会性の進化により人は誰でも生産者であると共に消費者であることに気づく。人の生活という視点から見れば、「一人の労働者は生産者としての権利と消費者としての権利を共に受ける」。そこで賀川の目指す社会がどのようなものによって組織されるかという、それはギルドとしての「生産(者)組合」と「消費(者)組合」である。この社会化主義に基づく社会改革理念を「社会連帯の新理想主義」と賀川は呼んだ。賀川はその特徴を20項目にわたって挙げ、マルクス主義のそれと対比している。そのうちの最初の6つを示すと、以下の通りである。

「マルクス主義	社会化主義
中央集権	各部調整
官僚化	自由結社

分配主義	創造主義
工場経営の官僚化	工場民主
無産者専制	社会連帯
社会の機械化	社会の自由進化」(同；263 頁)

「各部調整」は今日のいい方では「各部分権」といえばわかりやすい。1920 年の書物に示されたこれら「社会化主義」を特徴づける諸理念のいずれもが 21 世紀の今日においてそれらの意義がとりわけ強調されているものであることには注目してよいだろう。

生産者と消費者は相互の「社会連帯」＝「相互扶助」にこそ満足を見出すべきだと賀川は説いている(同；322 頁)。

3 協同組合社会の構想へ

賀川豊彦は『主観経済の原理』で経済価値と宗教価値とは背馳しない、背馳しないどころか経済価値は宗教価値の一部として「尊まれ得る」と述べた。賀川の抱くキリスト教神学に経済は如何に位置づけられるのか。賀川は論文「キリスト教兄弟愛と経済改造」(1936 年)においてこの問題を扱っている。

賀川の神学思想の根本はイエス・キリストの贖罪愛＝十字架愛への信仰である。「私は、十字架愛の原則を、ただ一種の教条として聖壇の上に残して置かないで、キリストの如く全生命、全社会に生かして行かなければならぬと思ふ。其処にキリスト教の本質が、経済運動の本質とならなければならない原理が存在している」(全集 11；188 頁)と賀川はいう。賀川は生涯にわたりプロテスタント・キリスト教の信仰を堅持したが、「近代キリスト教の本質が神に対する絶対の信頼のみにあつて、愛の活動にはないと考へ、経済生活から宗教運動を全然分離せんとする態度に出る者があるが、誠に悲しいことである」と述べ、プロテスタント的信仰のあり方を批判している。「我々は…神がその愛によつて完全に人類を救ひ得ることを信じ、神の愛としての贖罪愛を社会に実現して、神より来る言葉を日々聴き続ける必要がある」と賀川はいう。こうした賀川の贖罪愛の理解にはきわ立ったひとつの特色があると隅谷三喜男は指摘している。その特色とは、贖罪における罪が罪というよりも人間あるいは社会の不完全さとして捉えられ、その不完全さの克服は人間の成長により実現できると考えられていることである(隅谷 1995；191~2 頁)。賀川が進化論を素直に受け入れられたのもこの点とかわわっている。

賀川は「神の愛」への信仰を通して一種のエキュメニカルな方向へ向いている。賀川の発言は、1910 年代から始まった国際宣教協議会(IMC)のエキュメニズム運動と呼応していた。同協議会は 38 年 12 月にインドのマドラスで大会を開いた。64 か国から約 500 人が参加したこの会議には日本からも 23 人からなる代表団が派遣され、賀川はその一人であった。会議ではキリスト教の社会的責任に関する宣言が示された。シルジェンによればそれは次の 6 点にまとめられる。①我々は誰でもその人種、生まれ、肌の色、または文化と関係なく一人の人間と見なす。②我々は人類を協力の単位とする。③我々は全ての人間の自己開発のための機会の平等を要求する。④我々は様々な国家に開かれている経済的機会の現状は最も非キリスト教的であると見なす。⑤戦争は人間性への侵害であり、キリスト教徒の良心にもとるものだから、我々は国際間の紛争を解決する手段としての戦争を拒否する。⑥我々は引き裂かれ混乱している罪深き世界に神が我々に下さる

「神の国」を与えよう（シルジェン 2007; 255）。

賀川は「キリスト教兄弟愛と経済改造」の末尾でこう述べる。「若しも経済行動を今日の儘に捨てて置けば、永遠に世界平和は来ない。また宗教を今日の儘に捨てて置けば、永遠に世界平和は来ない。十字架の上に現れたる贖罪愛意識が、協同組合運動に依る兄弟愛を通して、万国の経済活動にまで応用せられるならば、その日にこそ世界平和は地上に來たといふことが出来やう」（全集 11; 224）。国内の及び国際的な協同組合運動は、賀川にとって今や、キリスト教界の国際的なエキュメニズム運動と重なり合って、最も望ましい社会改革策として確信された。それは賀川の協同組合論の主著となる『産業組合の本質とその進路』（1940 年）の執筆へと結び付いた。

賀川が『主観経済の原理』で説いた唯心的経済史観は 1940 年の著作でも全く変わっておらず、この考えの具体像として賀川の協同組合論があるといえる。『産業組合の本質とその進路』において、賀川は 1900 年の産業組合法制定以来の産業組合を「日本の産業組合は今日まで…倫理運動の自覚も、意識経済の根本認識も持たずして発展してきた。そのために組合員数だけは増加したけれども、組合意識に於ては誠に欠けたものがある」（全集 11; 237 頁）と批判する。以前「主観経済」と呼んでいたものがここでは「意識経済」といい換えられているが、意味するところは同じである。「自分だけ儲ければよいといふやうな、そんな貪欲で産業組合を作るならば、そんなものは発展しない。…協同組合は儲けんが為めに作るのではない。即ち、日本の窮状を救ふ為め、都市、農村の連絡を公正なる価格によつて、うまく、資本を集積せず、全日本を改良する、その為めに、此の運動をするのである」（同; 266 頁）。保健組合（健康保険、生命保険）、生産組合、販売組合、信用組合、共済組合（教育共済、失業共済）、利用組合（電力・ガス・水道・交通等の事業）そして消費組合を論じ、これらの協同組合が相互補完的に経済生活の全体を覆うことにより協同組合はその効果を十全に発揮すると賀川は考えた。

4 まとめ

プロテスタント信仰には個々人の日常における生活規律や良心といった個人の内面性を主要な関心事とする倫理観がある。賀川豊彦の信仰はそれとは異なっていた。「神に対する絶対の信頼は誠によい。然しそれが、手足の活動を休止して居て、且つ神に救はれ得ると信ずるものであるならば、それは一種の迷信である」（全集 11; 188 頁）とまでいつている。賀川の贖罪信仰をめぐって、雨宮栄一は「およそ贖罪信仰を内実とする正統主義に立った人たちの中で、救霊を課題としながらなお社会の問題に実践的に関わり続けたのは、内村でも植村でもなく、賀川であったと言わなければならない。ここに賀川の信仰理解の特徴があるといつてよい。同一の贖罪信仰に立ちながら、何故、賀川は社会運動に深くコミットしたのか」（雨宮 2005; 231 頁）と問う。贖罪愛は神の愛であって人間の愛ではない。しかし賀川が「神の愛としての贖罪愛を社会に実現する」という場合、それは申英子（シン ヨンジャ）がいう「愛する権利」の主張と似ている。申は、愛することが義務であるならばこれを奪っても義務の免除にすぎないが、愛することは権利であるからこれを奪うことは人権侵害だという。そして「「ただ信仰のみ」ではなく「聖霊による愛にあって働く信仰」という愛する権利確立の神学」の樹立を説く（申 1995; 489-91 頁）。解放の神学の系に属する神学思想はいわば当事者の神学である。当事者でない者が

彼らと連帯するためには、彼らを「愛する権利」が必要である。

賀川は晩年に『宇宙の目的』(1958 年)という著書を書き下ろし公刊した。賀川は同書の結末近くで、ダンテが「宇宙の究極目的」を見極めることを断念したことに触れ、自分もダンテに同調するという。しかし人間には「宇宙悪」を生み出す人間の不完全(有限)さを知るという「精神」をもたらされている。この「精神」が無限絶対にまで接近しようとする意欲を起こしたことは勇壮なものであるとせねばならない(全集 13; 453 頁)と述べている。賀川にとって「宇宙」と協同組合の運動とは「愛」によって貫かれ、思想的に一体のものとなっていた。そこには「神はどこに」と「人間はどこに」という神学と社会科学とをつなげるまことにユニークな発想を見ることができる¹⁾。

1) 協同組合の思想に関して最近、柳田国男(藤井 2006)とマハートマ・ガンディー(石井 2007)についての論考が出された。またバングラデシュでグラミン・バンクを实践するムハマド・ユヌスの思想も協同組合に近いという評価がある(ユヌス 2007)。賀川を含めこれらの思想の生産的対話は興味深い課題となろう。

文献

※テキスト：『賀川豊彦全集』全 24 巻(初版) 1962~64, キリスト新聞社

※書誌：米沢和一郎編 1992, 『賀川豊彦』; 同 2006, 『賀川豊彦Ⅱ』日外アソシエーツ

雨宮栄一 2003, 『青春の賀川豊彦』; 同 2005, 『貧しい人々と賀川豊彦』; 同 2006, 『暗い谷間の賀川豊彦』新教出版社

安保則夫 2007, 『近代日本の社会的差別形成史の研究- 増補『ミナト神戸 コレラ・ペスト・スラム』-』明石書店

石井一也 2007, マハートマ・ガンディーの経済思想- チャルカー運動の再評価-, 八木紀一郎編『非西欧圏の経済学- 土着・伝統的経済思想とその変容-』日本経済評論社, 所収

金子啓一 1995, 神と現代人(2)- アウシュビッツ・ヒロシマと現代神学, 熊澤・野呂編 1995 所収
熊澤義宣・野呂芳男編 1995, 『総説現代神学』日本基督教団出版局

シルジェン, ロバート 2007, 賀川豊彦- 愛と社会正義を追い求めた生涯- (賀川豊彦記念松沢資料館監訳) 新教出版社

申 英子 1995, 反差別の神学(2)- 反差別神学としての愛する権利の確立, 熊澤・野呂編 1995 所収
スタックハウス, マックス・L. 2004, 『公共神学と経済』(深井監訳) 聖学院大学出版会

隅谷三喜男 1995, 『賀川豊彦』岩波書店(旧版 1966 日本基督教団出版部)

セン, アマルティア 2000, 『自由と経済開発』(石塚訳) 日本経済新聞社

藤井隆至 2006, 柳田国男- 協同組合の思想家-, 大森郁夫編『日本の経済思想Ⅰ』日本経済評論社, 所収

松野尾 裕 2007-1, 地域の可能性と限界- 規範理論的研究の論点整理-, 愛媛大学プロジェクトチーム編『えひめ 知の創造』愛媛新聞社, 所収

松野尾 裕 2007-2, The Capability Approach へ- 人間への励ましとしての経済の原理を求めて-, 『地域創成研究年報』第 2 号, 愛媛大学, 所収

松野尾裕 2008, 賀川豊彦の経済観と協同組合構想, 『地域創成研究年報』第 3 号, 同上, 所収

ユヌス, ムハマド 2007, グラミン生協とグローバル社会に生きる村の女性たち- ノーベル平和賞受賞に際して- (上)(下) (小杉訳), 『福音と世界』2007 年 11・12 月号, 新教出版社, 所収